百々裏話（32）

おもて　あきら

【謡曲作者付の色々―その二―】

前回に掲出した**元禄謡本作者付**が、内組分と外組本とでは全く異質であることは、一読して明瞭であろう。外組分は、八帖花伝書の奥書（めいた部分）に名の見える観世音阿弥・今春善竹・宝生連阿弥・金剛そうせつ、及び世阿弥の五人を能の作者に擬し、格別の根拠もなく百曲の作者を右の五人に割りあてたものに過ぎまい。謡本編者が、内組分と揃えるために施した工作と言ってよいであろう。

内組分はそうではない。これが『能本作者注文』系統の作者付であることは、少し調べればすぐ理解できる。ただ、作者の名を初めとして、『注文』とはあまりに相違が多いため、同系統であることに疑念も持たれるのではあるが、これは、内組分が直接『注文』に拠ったのではなく、『注文』系の別の作者付に基づいていることに由来するかのようである。その『注文』と元禄謡本作者付内組分との間に介在すると思われる別の作者付を、次に紹介しよう。

(2)諷指南作者付

貞享三年五月山田六左衛門刊の「諷指南」は、謡に関する諸心得を説いた本であるが、その末尾に「能之舞手作者之覚」と題する作者付が附載されている。それを「諷指南作者付」と仮称し、ほぼ原形のまま（但し振仮名を除いた）翻印しておきたい。

能之舞手作者之覚

観世世阿弥分

高砂　養老　田村
鵜羽　采女　班女
清経　兼平　卒都婆小町
白楽天　實盛　柏崎
老松　井筒　頼政
鉢木　羽衣　鵺
融　梅枝　志賀
難波梅　忠信　藤戸
木賊　蟻通　朝長
三井寺　安古木　景清
杜若　当麻　誓願寺
松風　矢嶋　呉羽
桜川　東岸居士　蟬丸
源氏供養　敦盛　江口
海士　花形見　檜垣
舟橋

梅若仕舞囃子形付

第1冊・第2冊・第3冊・第4冊

美濃半紙判・枕本糸綴　各　¥1,200

杖物・薙刀物等の習物を含む梅若謡本の全曲。

ご希望の方に1冊から4冊までの内訳表をさし上げます。

能謡図書・うたひ用品各種

能樂書林　神田神保町3―6　電話(261)0813・0848



タブロイド版　六頁
月刊・毎月一日発行
一部　四〇円
一年五〇円　送料共　送料六円

春日竜神
二人静
道成寺
天鼓
女郎花
軒端梅
野々宮
竹雪
経政
金札
大江山
常陸帯
輪蔵
土車
大社
黒主
伏見
逆鉾
玉鉾
遊屋
六月祓
求塚
橋姫
丹後物狂
玉水
実方

蘆刈
右近
雲林院
守久
佛原
鶏
道明寺
歌占
知章
花月
松尾
三之山
松虫
白主
吉野琴
箱崎
貞任
飛鳥川
経書堂
御祓
横山
鳴不動
融通
野守

富士太鼓
関寺小町
通小町
三輪
錦木
百万
自然居士
八幡攅衣
春栄
葛城
佐保山
吉野静
舎利
車僧
泰山府君
鼓滝
神有月
七夕
須广
関物狂
雲雀山
反魂香
逢坂
小野物狂
融通
獅子

鞍馬
右扇の手舞の品悉く世阿弥まひはじめられしより世にひろまれり されバ 世阿弥を能の元祖とす
禅竹分
葵上
小塩
定家
長良
綱
右
川上神主分
鞍馬天狗
紘上
右
宮増弥左衛門分
元服曽我
錦戸
調伏曽我
右
三條殿分
狭衣
右
内藤藤左衛門分
夕顔
右

草紙洗
遊行柳
舟弁慶
西行桜
皇帝
芭蕉
朝比奈
文学
氷室
菅相丞
三條殿分
俊成
内藤藤左衛門分

花車
千手
玉葛
矢立鴨
小督
韋駄天
住吉
貴備津宮



化学工業の
総合メーカー

電気化学工業

プラスチック・化学薬品
電炉品・肥料・セメント

能・お茶の御写真

観世写真部

前島良彦
前島久男

港区芝白金里町七七
電話白金(441)一八四七五番
一五〇〇九番

小田堤頭分
朝顔
右
竹田法印脇与次郎分
是害
右
細川入道栄堅殿分
浮舟
右
舞初不二分明一分
熊野参　陽貴妃　安達原
猩々　安宅　唐舟
殺生石　放下僧　松山鏡
竹生嶋　小袖曽我　七騎落
和布刈　熊坂　磯童子
岩舟　鉄輪　鐘巻
東永　祇薗　濱川
鈴木　靍亀　那須与市
鎌田二度懸　清重　漢陽宮
守屋　高綱　邯鄲
摂待　経盛　座主流
墨染桜　鴨物狂　木曽
陶淵明　粉河　厳島
うたふ　貴天狗　降魔
もろよし　源氏　江嶋
岡崎　りよかう
異国退治　村山　馬淵
だいせ太子　久世戸
胡蝶　吉野天狗　盛長
惟盛　三河　高祖
竜虎　知忠　亀井
貴布禰　太刀　刀
宮川　淡路　竹取
季花　くかみ　さなだ
長兵衛　驚
右
内藤河内守殿分
木玉　浮玉
右

右以二観世弥次郎本一写レ之
猶ヲ於二此ノ本一不レ可レ有レ疑者也
元和三年卯月吉日

この諷指南作者付が、『能本作者注文』と密接な関係を持っていることは、両者を比較すれば容易に知られよう。だが、一致しない点や、重要な相違もまた少なくはない。次回には、『能本作者注文』と諷指南作者付との関係、及び諷指南作者付と元禄謡本作者付内組分との関係について考察してみたい。

（40・1・29）



